

犬の誤食内容と発症時期に関する検討

三木 無量

三木どうぶつ病院、京都夜間動物救急センター

はじめに

犬の誤食は日々の診療でしばしば遭遇し、その内容は多岐に渡る。来院が特定の時期に集中するものも知られており、Nobleら（2017）およびWeingartら（2021）は、それぞれイギリスおよびドイツの動物診療施設を対象とした研究の中で、チョコレートの誤食件数は12月やイースター祭、クリスマスに顕著な増加が見られたことを報告している。一方、本邦において、同様の報告は演者が調べる限り見当たらない。そこで本研究では、誤食内容と発症時期に着目し、関連性を調べることを目的とした。

材料および方法

2016年1月から2020年12月までに京都夜間動物救急センターを受診した症例を対象とした。誤食内容はThe ASPCA Animal Poison Control Centerの分類を参考に「異物」、「薬剤」、「チョコレート」、「食品」、「植物」、「殺鼠剤・駆除剤」、「その他」、「複数」に分類した。

「複数」は上記分類の2種類以上を同時に摂取したものとした。誤食したことが確実で無い症例（直接目撃していない、吐物内に見られない、画像検査などにより確認できないなど）は本研究から除外した。それぞれの群の症例を月別に分類し、誤食症例全体の月別症例数と比較することで来院傾向を調べた。また過去の報告（Nobleら、2017）を参考にリスク期間をバレンタインデー、ゴールデンウィーク、お盆、ハロウィン、クリスマスとし、リスク期間を含む週数に前後の週数を加えた期間の症例数とリスク期間以外の症例数との比較検討を行なった。また流通や消費の変化により誤食時期の変化が見られる可能性を考慮し、「食品」のうち症例数が10以上のものに関しては上記と同様の検討を行なった。統計処理はフィッシャーの直接確率計算法を用い、 $p < 0.05$ を有意水準とした。

結果

全体の誤食症例は556症例であり、年齢の中央値は2歳11ヶ月齢（範囲：2ヶ月-17歳）、体重の中央値は4.5 kg（範囲：0.4-57.5 kg）であった。異物は267症例、薬剤は60症例、チョコレートは87症例、食品は93症例、植物は8症例、駆虫剤は9症例、その他は23症例、複数は9症例であった。食品のうち症例数が10を超えたものは、玉ねぎ（31症例）とブドウ（13症例）であった。チョコレートおよび食品の症例数は、それぞれ2月と8月に有意に高く、リスク期間ではそれぞれバレンタインおよびお盆期間中に有意に高い結果となった。8月およびお盆期間中の食品の大部分はブドウが占めており、ブドウはそれらの期間で有意に来院数が多かった。その他の群において、月別分類やリスク期間との相関は認めなかった。

考察

チョコレートおよびブドウの誤食症例は特徴的な来院傾向を示した。いずれも本邦において消費・購入量が増加する時期と一致しており、1施設での研究ではあるものの、オーナーへの十分な注意喚起が必要と思われる。